

**成人知的障害者における口腔衛生管理について：
グループホーム居住者における問題点(東日本歯学会第23回学術大会 一般講演抄録)**

著者名(日)	関口 五郎
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	24
号	1
ページ	118
発行年	2005-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00009921/

施設職員を対象とした口腔ケアについての集団指導の効果

○工藤美代子*, 林 千代美*, 佐藤 万美*, 宮崎 明香*, 大谷 優子*,
牧浦ひろみ*, 越野 寿**, 松原 国男**, 越智 守生*

*北海道医療大学歯学部附属病院歯科衛生部, **地域支援医療科訪問診療室

【目的】近年、顎口腔系機能と心身の健康との関係が注目されており、顎口腔系機能の保持・増進のためには口腔ケアの充実が不可欠であると考えられる。しかし、障がい者（児）においては、自身によるブラッシングのみで十分な管理を行うことは困難であり、介助者によるブラッシングの補助が必要になるケースが多い。

知的障がい者援護施設「厚田はまなす園」の職員を対象に、入所者に対する介助歯磨きを含めた口腔ケアの集団指導を実施し、指導実施前後にアンケート調査を行ったので報告する。

【方法】調査対象は、厚田郡厚田村知的障がい者援護施設「厚田はまなす園」に従事する直接支援職員21名であり、指導前（1回目）に4項目について、指導後（2回目）に、前回の質問と感想を含む6項目についてアンケート調査を行った。

【結果および考察】アンケートの回答率は、1回目100%、2回目

76.2%であった。1回目の調査では、口腔ケアの組織的な取り決めが不十分であること、口腔ケアに対する知識不足などの問題点が明らかになった。

2回の調査を通じて、就寝時仕上げ歯磨きを行う職員数の増加（0名から3名に）平均歯磨き回数（4回から5回に）、平均歯磨き時間の増加（1分から1.5分）が認められた。また、歯科衛生士による集団指導について、95%の職員から年数回、継続的に行って欲しいとの回答が寄せられた。

以上のことから、我々の集団指導が、施設職員個々の口腔ケアについての問題解決に結びつき、意識の向上がなし得たと考えられる。しかし、口腔ケアを行える環境の整備等の組織として取り組むべき問題は残っており、施設職員への啓発も必要であると考えられる。

成人知的障害者における口腔衛生管理について ーグループホーム居住者における問題点ー

○関口 五郎

東京都立心身障害者口腔保健センター

【目的】近年障害のある方々を取り巻く生活環境や施設の形態も多様化している。そしてこれまでの学校や施設での生活から、社会参加への環境が広がっている。中でもグループホームは、少人数での共同生活を通じて障害のある方々の自立を目指す新たな生活形態として、全国的にその数が増加している。今回入所施設からグループホームに移り、それまでの口腔内の状況にも変化がみられたものの、グループホーム担当者の援助も受けることにより、改善の方向をみている一症例について報告した。

【症例】43歳女性。養護学校卒業後、通勤寮と入所更生施設をへて、40歳時よりグループホームで4人の共同生活を続けている。当センターには施設入所当時より13年間継続して受診していた。しかしグループホームに転居し、以前よりも日常の口腔清掃が不十分であることにホーム担当者も気がかりとなっていた。転居約一年後、担当者に付き添われ再び当センターを受診した。

【経過および考察】本症例では施設入所時のように職員が関わるケ

ースが少なくなり、また自分の身の回りのことで各個人に任される範囲が広がったことから、日常の口腔清掃も不十分となり、これまで良好に保ちつつあった口腔内の状況が不良となっていた。歯科医師、歯科衛生士にグループホーム担当者をまじえ、本人の生活状況や日常生活習慣の自立度などを再確認し、診療方針の再検討を行った。また歯科通所にはグループホーム担当者も同伴していただくなど連携をとりながら、現在当センターで歯科治療、予防指導を継続している。口腔内には依然として課題は残るものの、時間をかけた本人磨きそして担当者による仕上げ磨きの習慣が定着しつつある。

今回のケースを通じ、障害のある方々を取り巻く生活環境や施設の形態が、口腔衛生管理にも及ぼす影響が考えられた。今後も同様のケースがみられることも予想され、患者さんを取り巻く環境を再確認し、対応の仕方や診療方針について、再考する機会を持つ必要があるものと思われた。

口蓋Implantを用いて矯正治療を行ったAngle Class I上下顎前突症例

○岡山 三紀*, 村田 勝**, 有末 眞**, 柴田 考典***, 溝口 到*

*北海道医療大学歯学部矯正歯科学講座, **北海道医療大学歯学部口腔外科学第2講座,

***北海道医療大学歯学部口腔外科学第1講座

【目的】矯正治療における固定源は、治療結果を左右する重要な因子の一つである。解剖学的に、上顎骨は下顎骨に比べて皮質骨の厚みが薄いため、臼歯を固定源として用いた場合、近心移動すなわち

anchorage lossを生じやすい。

臼歯咬合関係が正常（Angle I級）の場合、小臼歯抜去後に上顎臼歯部の近心移動により前歯部後退量の減少や、臼歯の正常咬合関